



### ■はじめに

私は、平成14年3月に富士設計(株)に入社し、今年で16年目になります。入社から5年間は、技術職として、主に送配水施設の設計に従事してきました。その後、当時営業部長であった現社長のもと、営業職に転属され現在に至ります。私の話はここまでしておきまして、今回は広報紙「水坤」からの執筆依頼をいただいたので、私の故郷、「土佐の高知」について簡単ではございますが、ご紹介させていただきます。

高知県は、四国の南部に位置し、北は四国山地、南は太平洋に面して扇状に突き出しており、恵まれた自然環境が調和し、豊かで変化に富んだ風土がつくられているところであります。面積は約7,104km<sup>2</sup>と四国四県では一番大きく、全国では18番目に大きい面積を有しています。このうち、森林面積は約84%を占めています。また、「土佐」の呼称は、古くから国生みの神話のなかで、土佐国建依別（とさのくにたけよりわけ）と呼ばれ、雄々しい男の国とされています。

### ■カツオのたたき

高知県の郷土料理といえば、誰もが「カツオのたたき」と答えるほど、今では全国的に有名になりました。そこでその由来についてご紹介させていただきます。

江戸時代初期、関ヶ原の戦いで徳川家康を支持し、土佐一国を与えられた「山内一豊」の時代、カツオを生で食べて食中毒になる者が後を絶たなかったために、カツオの生食を禁じたと言われて

います。しかし、領民たちはそれでもカツオを生で食べたいと表面だけを炙って焼き魚と称して食べていたのが「カツオのたたき」の由来という説があります。また、漁師たちのまかない料理として食べられていたとも言われています。その他にも、長宗我部元親が四国平定の折にカツオの大漁に遭遇し、藁で焼いてステーキにして食べたとか、明治維新の時代に西洋人に食べさせるために表面を焼いたなど諸説あります。

色々な説がありどれが本当かはわからないのですが、鮮度が重要で傷みやすいカツオだからこそ「カツオのたたき」が生まれたのではないかと思います。



写真-1 カツオのたたき

### ■四万十川

「四万十川」は、高知県の西部を流れる四国最長の大川（全長196km）であり、「日本最後の清流」として知られており、火振り漁や柴漬け漁など現在でも伝統的な漁が行われています。上流から下流にかけては、「四万十川」の風物詩でもある数多

くの「沈下橋」(47橋)が存在しています。「沈下橋」は、欄干がなく川の増水時に水面下に沈むことで流出しないように作られた橋で、今も住民の必要不可欠な生活道として利用されています。また、「四万十川」の名称についてですが、実は河川法制定時に登録された正式名称は「渡川(わたりがわ)」でした。元々、下流の旧中村市(現四万十市)周辺では渡川と呼ばれており四万十川は通称でしかありませんでした。しかし、「日本最後の清流 四万十川」として一躍脚光を浴びることになり、多くの地元住民から名称変更の要望が起り、平成6年7月25日に「四万十川」に変更されています。



写真-2 四万十川と沈下橋

## ■桂浜と龍馬像

「桂浜」は、高知県高知市浦戸に位置し高知県を代表する景勝地の一つであり、龍頭岬と龍王岬の間に弓状に広がる砂浜で、五色の砂浜、浜辺を囲む松の緑が美しく、紺碧の海が箱庭のように調和する見事な景勝地であります。古くから土佐の民謡「よさこい節」にも詠われ、「月の名所は桂浜・・・」と高知県を代表する名所の一つと知られております。

また、「桂浜」の背後の山一帯が、長宗我氏最後の居城、浦戸城跡であります。築城にあたっては、当初、長宗我部元親は現在の高知城がある大高坂山に築城しようとしていましたが、近くを流れる鏡川の治水に失敗したため、浦戸へと移ることにしました。その後約10年間、元親の子の盛親が関

ヶ原の戦いで敗れるまで、長宗我部氏の居城でありました。

次に、桂浜内の高台にそびえ建つ「龍馬像」についてですが、像の高さ5.3m、台座を含めた総高13.5m、銅像としては日本でも屈指の高さを誇ります。この「龍馬像」の建立のきっかけは、大正時代に遡ります。当時の「坂本龍馬」は、日本国内でも無名に近い存在であったようです。そこで、明治維新の功労者であり、船中八策を考案し、大政奉還の流れを作った土佐の英雄「坂本龍馬」の存在を世に広く知らせるために、一人の青年が立ち上がりました。その青年とは、高知県出身者で当時、早稲田大学の学生であった入交好保(いりまじりよしやす)氏でした。大正15年の夏、入交青年は、高知県出身の京都大学の学生らに呼びかけ「坂本龍馬先生銅像建立会」を発足させました。



写真-3 桂浜



写真-4 坂本龍馬像

しかし、青年たちは、まったく資金のあてもなく、ただ熱意のみで走り出しました。まず、入交青年達は、無銭旅行（当時、「土佐の交通王」といわれた、野村自動車の野村茂久馬氏の協力により実現する。）で高知県内の遊説に出発し、各地で銅像建設のための献金を募りだしました。そうした中で、「銅像と同時に映画も作ろう」と思いつき、生前の「坂本龍馬」をよく知る「元陸援隊副隊長・元宮内大臣：田中光顕伯爵（高知県高岡郡佐川町出身）」との出会いで、一気に龍馬像建立の運動が加速します。田中光顕伯爵の働きかけで、当時の天皇陛下の弟君、秩父宮殿下からも寄付が行われ、それにより高知県からも協力が得られ、高知県あげての事業として認められました。その結果、集まった寄付金は、総額二万五千元（現在に換算すると七千万～八千万）にのぼり、昭和3年春、日本近代彫刻の父といわれる高村光雲の弟子で、銅像制作では第一人者といわれる高知県出身者の「本山白雲」の制作により、「坂本龍馬像」はついに完成しました。

---

### ■室戸岬と御厨人窟（みくろど）

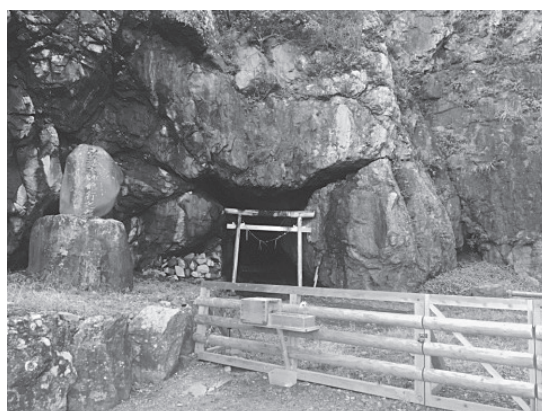
---

「室戸岬」は、高知県室戸市に位置し、古くから海の難所と知られており、海岸は繰り返し起きる地震時隆起の蓄積によって奇岩が乱立し、巨大地震によって引き起こされた大地の隆起の証拠を垣間見ることができます。そのため、世界各地から多くの地質学者がこの地を訪れ、平成23年9月に世界ジオパークに認定されました。また、室戸岬の先端近くには、坂本龍馬とともに活躍した明治維新の勤王の志士「中岡慎太郎像」（本山白雲作）が建立されています。

次に、室戸岬近くにある御厨人窟についてですが、四国でも屈指のワースポットと言われている洞窟で、真言宗の開祖である弘法大師の伝説が残る場所とされています。今から約1200年前の平安時代、当時青年であった弘法大師がこの洞窟で厳しい修業をしたと伝えられており、弘法大師はこの地で開眼し、洞窟の中から見えた風景が空と海であったため「空海」の法名を得たとされています。また、洞窟内に響く押し寄せる波の音は、



写真－5 室戸岬（展望台からの眺め）



写真－6 御厨人窟（落石のため、現在は立ち入り禁止）

環境省の「残したい“日本の音風景100選”」に選ばれています。

---

### ■おわりに

---

ここまで、高知県についてご紹介させていただきましたが、この「土佐の高知」にはまだまだ魅力に溢れる所が数多くございます。高知県は、「いごっそう（頑固で気骨のある男）」や「はちきん（男勝りの女性）」と呼ばれるほど自由で豪快な気風であり、おらかな中にも芯の通った県民性を持っています。また、美しく豊かな自然にも恵まれており、数多くの先人・偉人を輩出してきた歴史と風土があります。皆様もお時間がございましたら是非、豊かな自然と歴史ロマンを感じさせてくれる「土佐の高知」にお越しください。